

高学歴女性にみる老後意識の年代差

著者	西村 純一，斎藤 禮子，関口 紀子，宇和川 小百合，塩入 輝恵，飯島 由美子
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	32
ページ	179-189
発行年	1992
出版者	東京家政大学
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00008858/

高学歴女性にみる老後意識の年代差

西村 純^{*}・斎藤 禮子^{**}・関口 紀子^{**}・宇和川小百合^{**}・塩入 輝恵^{**}・飯島 由美子^{**}

The Generation Gap in Consciousness of One's Old Age among Women Having Higher Educational Background

Junichi NISHIMURA, Reiko SAITOU, Noriko SEKIGUCHI,
Sayuri UDAGAWA, Terue SHIOIRI and Yumiko IJIMA

(Received September 25, 1991)

はじめに

わが国の高齢化はますます先鋭化してきており、すべての人が生き生きとその生涯を送れる高齢社会の創造が、急がれている。そのため、行政、企業、地域社会、家庭、個人、それぞれの役割において、豊かな老後生活への取り組みを一層強めていかなければならない。その際、女性の対応が非常に大きな問題になるとみられる。例えば、従来、老親介護は嫁や娘が担い手となっていたが、これからもそれを維持できるかどうかは、女性の対応に負うところが大きい。また、女性は一般的に男性より長命であるだけに、配偶者に先立たれた後の生き方や自分自身の介護をどうするか、男性以上に考えざるをえない。このように女性の対応が鍵となる問題が多々あり、今後の高齢化への対応を考える上では、女性が老後をどのように考えているのか明らかにすることがきわめて重要になってきているといえよう。また、将来にわたっての対応を考えると、年代によってもその考え方はかなり違ってくるのが予想されるため、中高年女性だけでなく、若い女性も含めて年代的な比較検討も必要になってくる。

そこで、本研究では、家政系女子大の卒業生を調査対象として、現代女性が老後にどのように対応しようとしているのか、その年代的な傾向をおおまかに探ることとした。これは、ある意味で高学歴女性の調査であるため、意識に偏りが生じる懸念もあった。しかし、高学歴女性は、女子の高学歴化、女性の進出という時代の中でこれまでの男性中心の社会の矛盾をいろいろと強く

感じてきた人の多い層であり、それだけにまた新しい発想の芽生えが期待される層である。そうした積極的な女性の対応を考える上では、示唆に富む層であると考えられる。また、そうした意味では、高学歴女性の生き方を探ることは、ひいてはすべての女性の老後への対応を考えて行くことにつながると考えられるのである。いま一つ、卒業生調査は、同じ大学の卒業生に絞ることにより、学歴を統制し、それによって社会経済的状態をある程度統制することにより、年代間の比較をやりやすくするという利点もある。

これまでにわが国の高学歴女性の卒業生を対象とした調査としては、我々の知る限りでは「上智大学女子卒業生の生活と意識」(上智大学学内共同研究, 1985)、「お茶の水出の50年—高学歴女性の生活史と老後生活」(湯沢擁彦編著, 1975)及び「高学歴女性のライフコース—津田塾大学出身者の世代間比較」青井和夫編著(1985)の三つである。このうち上智大学の調査は戦後の卒業生のみを扱っており、戦前戦中の世代が欠けている。これに対して、お茶の水大学の調査は逆に若い世代が入っていない。この点、津田塾大学の調査はすべての世代間の比較を行っており、その意味で貴重であるが、老後意識の調査は必ずしも十分とはいえない。もとより卒業生調査によらない高学歴女性の調査はいろいろと行われているが(職業研究所, 1976; 富士谷あつ子・他, 1982)、それらは高学歴女性の就業と母性にかかわる内容が中心で、高学歴女性の老後への対応に関する調査はあまり行われていないのが現状である。そうした意味で、家政系女子大卒業生の老後意識調査は意義があるといえよう。家政系女子大卒業生に絞ったことにより、高学歴女性一般の傾向を見ることにはならないのではないか、という

* 文学部心理教育学科

** 家政学部栄養学科

懸念もある。しかし、大卒女性の一つの典型として家政系女子大卒業者の老後への態度を明らかにすることは意味のあることであると考えられる。

なお、女性の老後への対応には、年齢だけでなく、結婚歴、職歴、家族構成、居住環境、経済状態、健康状態、等々が複雑に絡んでくるとみられ、本調査ではそれらについても調査しているが、本研究では、とりあえず年代差に焦点を当てて報告することとする。

方 法

(1) 調査対象

東京家政大学の同窓会（緑窓会）名簿より、調査対象者を無作為に2,406人抽出した。その際、20歳から57歳までは大学卒、短大卒が半々の割合になるように配慮した。同時に、学科や専攻に偏りが生じないように配慮した。58歳以上は専門学校卒から抽出した。また、各年代の対象者数をほぼ同数にするため、年代によって抽出確率を変えた（年齢の高いほど卒業生が少ない傾向がある）。これらの対象者に対して、1989年の10月から11月にかけて郵送で調査を実施した。最終的に、20代239名、30代177名、40代223名、50代378名、60代265名、全体で1,282名の有効回答を得た（回収率、約53%）。

表1は、調査対象者の基本属性の年代別傾向を示したものである。

(2) 調査内容

調査表は大きく次のような3つのパートに分けられる。

基本属性：最終学歴（学科、専攻、卒業年）、年齢、配偶者の有無（配偶者の年齢）、正職員経験（通算年数）、現在の仕事の有無（就業形態）、生活水準、同居家族構成、居住地域、居住年数、健康状態。

現在の生活意識：各種生活満足度、食事状況、運動習慣、自覚症状、人間関係、自分をみつめるゆとり、大切にしたい時間、余暇の中で大切にしたいこと。

老後意識：老後開始年齢、老後の振舞い方、老後の家事分担、老後の子供との同別居（往來の時間）、老後の不安、夫の親の介護への態度、自分の親の介護への態度、自分の介護の相手、老後生活の中で一番頼りになるもの、老後へ向けての学習、自分のおばあちゃん像。

この他、後輩へのアドバイスの自由記述欄からなる。

本研究では、このうち老後意識のパートの回答を年代別に比較分析した結果について示すこととする。質問項目の詳細は、巻末の調査表（老後意識のパートのみ）を

参照されたい。

結果と考察

(1) 老後開始年齢

図1によると、老後開始年齢を70歳以降とみる人は20代や30代では約2割であるが、40代から60代にかけて増え、60代には過半数に達している。このうち割合は少な

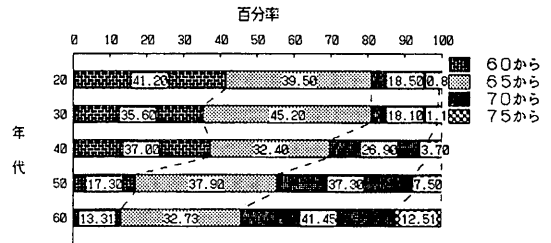


図1. 老後開始年齢

いが、75歳からとみる人も40代から60代にかけて増えている。一方、60歳からとみる人は、20代から40代では4割近く占めているが、50代から60代に欠けて減り、60代では1割強にすぎない。こうした二つの対照的な傾向の間において65歳からとみる人は年代によってそれほど大きく変化せず、多少減る傾向はあるものの60代でも3割強ある。全体としてみると、年代が上がるにつれて老後開始年齢が高まる傾向があるといえる。労働可能年齢の予想の調査でも、年代の高いほど労働可能年齢を長く予想する傾向がみられる（雇用職業総合研究所、1986）。こうした相対的に自分を若く生産的に認知する傾向の背景には、どのような心理機制が働くのであろうか。自分が若く老後が他人事であった頃には、一般的な通念（一般的な定年年齢、あるいは老年人口の区分である65歳）でとらえがちであるが、いざ自分がそうした年齢に近づき、その年齢の状況を自分の事としてとらえてみると、少なくとも精神的には若い頃とそれほど変わらないと感じるため、老後のもっと先の感じを持つのかも知れない。あるいは、老後に対してはまだ社会の中に非生産的な暗いイメージがあるために、それを無意識のうちに拒否し、先送りにする心理機制が働くためかも知れない。ともかく、年代が上がるにつれ、老後開始年齢を遅く認知する傾向があり、統計的に有意である ($\chi^2 = 147.2$, $df = 12$, $p < 0.001$)。

高学歴女性にみる老後意識の年代差

表 1. 対象者の基本属性に関する年代的傾向

基本属性／年代		20代	30代	40代	50代	60代
最終学歴	大学	1(0.4)	1(0.6)	0(0.0)	70(18.7)	256(98.1)
	短大	113(49.6)	119(69.6)	112(51.1)	137(36.6)	4(1.5)
	専門学校	114(50.0)	51(29.8)	107(48.9)	167(44.7)	1(0.4)
配偶者	なし	163(68.8)	19(11.0)	15(7.0)	58(16.7)	76(30.5)
	あり	74(31.2)	154(89.0)	199(93.0)	289(83.3)	173(69.5)
正職員 経験	なし	18(7.6)	19(11.1)	47(21.7)	105(28.9)	71(28.3)
	あり	219(92.4)	152(88.9)	170(78.3)	258(71.1)	179(71.3)
現在の 仕事	なし	54(22.8)	79(45.4)	79(36.2)	203(54.6)	173(65.5)
	あり	183(77.2)	95(54.6)	139(63.8)	168(45.2)	90(34.1)
	正職員	161(88.5)	55(60.4)	51(35.9)	84(50.6)	28(35.0)
	パート	9(4.9)	11(12.1)	37(26.1)	18(10.8)	9(11.3)
	アルバイト 自営業	8(4.4) 4(2.2)	10(11.0) 15(16.5)	13(9.2) 41(28.9)	8(4.8) 56(33.7)	5(6.3) 38(47.5)
主観的 生活水準	上	2(0.8)	2(1.2)	4(1.8)	14(3.8)	11(4.2)
	中の上	41(17.4)	34(19.8)	69(31.7)	119(32.7)	75(28.6)
	中の中	162(68.6)	115(66.9)	125(57.3)	197(54.1)	152(58.0)
	中の下	30(12.7)	20(11.6)	16(7.3)	32(8.8)	21(8.0)
	下	1(0.4)	1(0.6)	4(1.8)	2(0.5)	3(1.1)
同居家族	自分ひとり	14(5.9)	5(2.8)	3(1.4)	23(6.3)	33(13.1)
	夫	35(14.7)	14(8.0)	9(4.1)	97(26.7)	95(37.7)
	夫・未婚子	29(12.2)	93(52.8)	117(53.2)	139(38.3)	50(19.8)
	未婚子	0(0.0)	1(0.6)	4(1.8)	15(4.1)	11(4.4)
	親・夫・子	4(1.7)	38(21.6)	72(32.7)	39(10.7)	10(4.0)
	夫・息子家族	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	5(1.4)	17(6.7)
	夫・娘家族	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.3)	4(1.6)
	親・夫・子家	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(1.1)	3(1.2)
	その他	156(65.5)	25(14.2)	15(6.8)	40(11.0)	29(11.5)
居住地域	23区内	60(25.1)	28(15.8)	29(13.0)	83(22.1)	58(21.9)
	東京近郊	116(48.5)	72(40.7)	83(37.2)	123(32.7)	105(39.6)
	大都市	6(2.5)	10(5.6)	11(4.9)	18(4.8)	7(2.6)
	大都市近郊	5(2.1)	4(2.3)	6(2.7)	11(2.9)	7(2.6)
	県庁所在地	16(6.7)	17(9.6)	27(12.1)	46(12.2)	28(10.6)
	その他の市	27(11.3)	31(17.5)	37(16.6)	62(16.5)	37(14.0)
	町や村	9(3.8)	15(8.5)	30(13.5)	33(8.8)	23(8.7)
健康状態	非常に健康	48(20.1)	46(26.0)	36(16.1)	63(16.7)	24(9.1)
	まあ健康	181(75.7)	125(70.6)	174(78.0)	284(75.3)	216(81.5)
	病気がち	8(3.3)	3(1.7)	7(3.1)	15(4.0)	11(4.2)
	病気である	2(0.8)	3(1.7)	6(2.7)	15(4.0)	14(5.3)

(括弧内は%)

(2) 老後の振り舞い方について

図2によると、どの年代も年齢を意識せず振り舞うのが

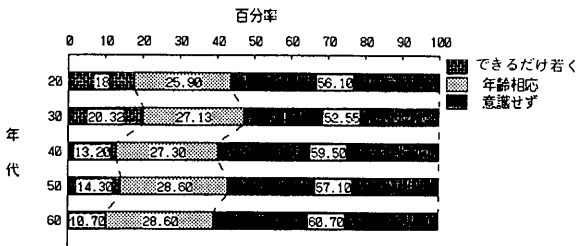


図2. 老後の振り舞い方

良いとする考え方の人がもっとも多く、年齢相応に振り舞うのが良いとする考えの人がそれに次いで、できるだけ若く振り舞うのが良いとする人はもっとも少ない。年代と老後の振り舞い方との関係は統計的には有意ではないが、年代が上がるにつれて、できるだけ若々しく振り舞うのが良いという考え方の人がやや減る傾向がある。年齢の若い方がむしろ若く振り舞うのが良いとする人が多い点は興味深い。肌の曲がり角とって美容に執着するのはむしろ若い女性で、ある程度の年齢になると、老いを受容するようになるのであろう。また、年代が上がると、年齢を意識せずに振り舞う傾向が良いとする考え方の人が多少増える傾向がある。年をとっても生きがいをもって生き生きと生活している人へのインタビュー調査（雇用職業総合研究所，1989）によると、そうした方々は年齢を意識せずに生きているという。年齢を意識したり、若く振り舞ったりするのは、精神的には必ずしも良い状態とはいえないかもしれない。

(3) 老後の夫の家事分担

図3によると、夫も家事の手伝い程度はすべきであるという考えがどの年代でも大勢を占めているが、こうし

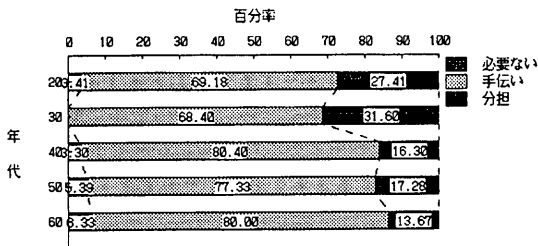


図3. 夫の家事分担

た考えは30代以下よりも40代以上の方が多い。逆に、夫も家事を分担すべきであるという考えは、40代以上よりも30代以下に多く、とりわけ30代が多い。これはそれだけ30代が家事、育児でたいへんな時期であることが反映されているように思われる。なお、夫は家事などする必要がないという伝統的考えは少数ではあるが、年代の高いほど増える傾向がある。ただし、20代にもそうした考えの人が若干いて興味深い。こうした年代と老後の夫の家事分担についての考えとの関連は、統計的に有意である ($\chi^2 = 40.3$, $df = 8$, $p < 0.001$)。時代による影響や自分自身仕事を持っているか、それがフルタイムかパートタイムかによっても異なるとみられ、さらに分析する必要があると言えよう。

(4) 老後の子供の家族との同別居

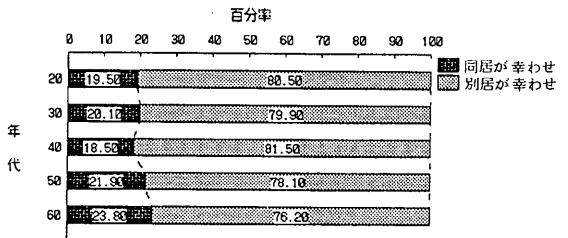


図4. 子供の家族との同居

図4によると、50代までは約8割が別居志向である。他の調査（老川寛，1985；清水浩昭，1985）と比較して、別居志向が多い傾向が伺われる。これは、本調査が高学歴女性を対象者を限定していることが影響しているように思われる。すなわち、これは、高学歴女性が、伝統的な多世代同居にとらわれず、経済的・情緒的に自立志向が強いことを反映しているとみられる。さらに、本調査の対象者に都市の居住者が多いことも少なからず影響しているとみられる。なお、統計的に有意ではないが、60代になると多少同居志向が増える徴候がみられる。これは、体の衰退にともなう依存傾向や伝統的家族観などが影響しているかもしれない。しかし、こうした老後の子供との同別居は、配偶者の有無、健康状態、子供に対する愛情や執着、自分の介護の相手、老後の頼り、社会的ネットワークなどの条件によっても違ってくると考えられ、さらに分析する必要がある。

(5) 老親介護

図5、図6はそれぞれ夫の親の介護、自分の親の介護

への態度をみたものである。これらによると、夫の親の介護も自分の親の介護も年代的傾向はほとんど似ており、

り、社会的ネットワークなどとの関連をさらに分析する必要がある。

(6) 自分の介護の相手

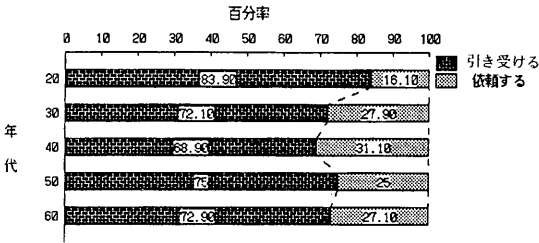


図5. 夫の親の介護

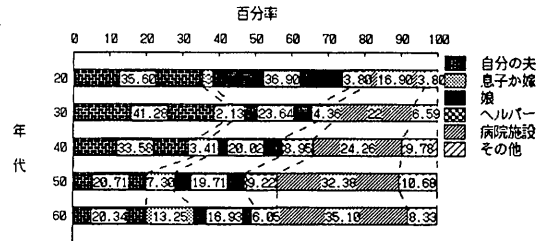


図7. 自分の介護

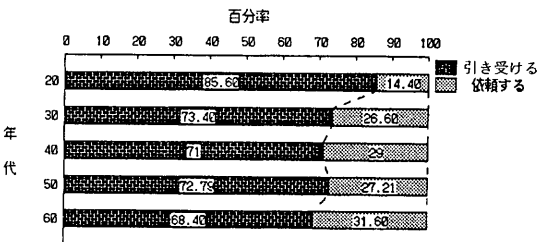


図6. 自分の親の介護

図7によると、自分の夫は30代でピークで約4割を占めるが、50代や60代では約2割に減る。自分の娘は20代でピークで約37%を占めるが年代が上がるにつれて減り、60代では約17%にすぎない。これに対して、病院・施設は20代では約17%にすぎないが、年代が上がるにつれて増え、60代では35%強になる。また、割合としては少ないが、息子か嫁は、年代が上がるとともに増え、60代では13%強になる。ヘルパーも年代とともに上がる傾向があり50代では9%強になるが、60代では少し減って6%というところである。こうした年代と自分の介護の相手との関連は、統計的に有意である ($\chi^2 = 122.1$, $df = 20$, $p < 0.001$)。老親介護においては自分が嫁ないし娘としてその担い手となるという意識が非常に浸透しているが、自分の介護となると、嫁や娘に依頼するという人は概して少なく、むしろ病院・施設、あるいはヘルパーといった他人に依頼するという人が多い点が注目される。これは、子供に依存しないという意味では、先の老後の子供の家族との別居志向が多い点と一致しており、高学歴女性の一つの特徴といえるかもしれない。しかし、本来そうすることの方がお互いに幸せと考えているのか、老親介護の嫁や娘への負担の大きさを配慮しての自己犠牲的な屈折した心理を反映しているのか、さらに研究してみる必要がある。

(7) 老後不安

図8により、多重回答による老後不安の高いものから上位3位までを列挙すると、20代は経済状態の不安が多く、親の介護、健康状態の順。30代は健康状態、親の介護、経済状態の順。40代は健康状態、親の介護、自分の介護の順。50代と60代は健康状態、自分の介護、親の介

親の介護を引き受けるという積極的態度は20代でもっとも多く、20代から40代にかけてやや減り、50代、60代は多少変動はあるがそれほど差はない。こうした年代と老親介護への態度との関連はいずれも統計的に有意である ($\chi^2 = 14.1$, $df = 4$, $p < 0.01$; $\chi^2 = 19.7$, $df = 4$, $p < 0.001$)。親の介護を他人に依頼すると回答することがいかにも自分が非情であるかのように感じて、それほど積極的ではないが親の介護を引き受けると回答した人も中には含まれているかも知れないが、全体として約7割以上、20代にあっては8割強が積極的態度を示しているということは、嫁として夫の親を介護するという考えや娘として自分の親を介護するという考えが高学歴女性の間にも広く浸透しているという印象がある。また、親の介護を他人に依頼するという消極的な態度の人は、既に自分の親と同居のため夫の親の介護を他人に依頼しなければならぬあるいはこの逆、夫や自分の兄弟姉妹が既に介護していて直接介護しなくてもよい、住居が狭い、気を使う、老親が既に亡くなっていてその必要がない、などいろいろと理由はあるようである。これも、配偶者の有無、就業状態、家族構成、居住地域、健康状態、子供への愛情・執着、自分の介護の相手、老後の頼

護の順。経済状態の不安が年代が上がるとともに減るのは、年齢が高くなるにしたがって、経済的なストックが

に頼りになるのは自分自身であり、自分の健康がもっとも頼みの綱であるということの意味していると考えられる。それに次いで頼りになるのは肉親である家族であるが、しかし健康が圧倒的であることを見ると、できるだ

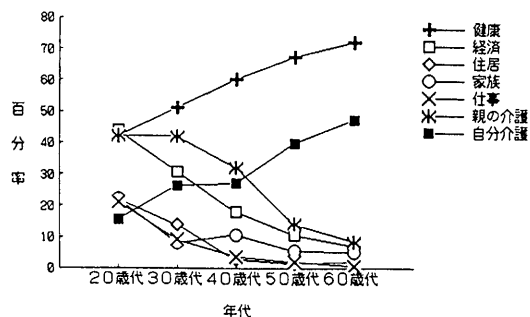


図8. 老後不安

増えてくるためとみられる。住居・住宅の不安も経済的な不安と同様、年齢が高くなるにつれて解消される傾向があり、40代までにはほとんどの人が解消していることが伺える。仕事の不安も基本的には経済的な不安と同様の傾向を示し、年齢が高くなるにしたがって解消される傾向がある。親の介護の不安も年齢が高くなるにつれて減る傾向があるが、これは年齢が高くなるにつれて、親自体が亡くなっていくため、親の介護の必要がなくなっていくためと推測される。しかし、60代においてなお8.7%の人が親の介護不安を抱いているということは、高齢者が老親を介護せざるをえなくなるという高齢化の状況を示唆しており、注目に値する。一方、健康状態に対する不安は、経済状態に対する不安と対照的に年齢が高くなるにつれて高くなる。年齢が高くなるにつれて、成人病などの病気による健康な生活の破綻、それに続く死への距離が近くなることに不安を抱くためとみられる。それとならんで、自分の介護への不安も年齢が高くなるにつれて高まっていく傾向が伺われる。

(8) 老後の頼り

図9によると、どの年代も健康が一番、次が家族、そしてお金、友達の順。ただし、健康を一番に上げる人は、年代とともに増加し、60代では86%にも達する。一方、家族やお金を上げる人は、年代が上がるとともに減少している。こうした年代と老後の頼りとの関連は統計的に有意であるが ($\chi^2 = 116.2, df = 12, P < 0.001$)、こうした傾向は、前の老後不安の結果とよく対応しており、基本的には同じような心理機制を反映しているとみられる。このように、健康を一番に上げるのは、究極的

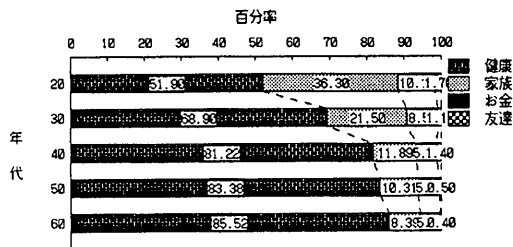
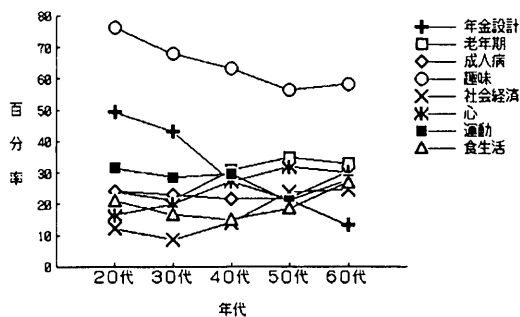


図9. 老後の頼り

け家族の世話にはなりたくないという姿勢が伺われる。また、友達を上げる人は、どの年代もほとんどいないが、これは、余暇活動などで楽しんだりする場合には、友達の存在が大きいが、頼りになる存在と認知している人はほとんどいないことを示しているように思われる。

(9) 生涯学習

図10によると、多重回答による将来学習してみたい内容の上位3位までを列挙すると、20代から60代まで趣味の充実がもっとも多い。また、20代や30代では年金・生活設計が2位であるが、40代以後は老年期の生き方が2位を占めている。そして、20代から40代まで3位は適度の運動が占めているが、50代や60代は3位が心の問題(ただし60代は成人病予防が同順位3位)。一方、内容別に年代差をみると、趣味の充実、20代がもっとも高



注：煩雑になるため割合の低いものについては割愛

図10. 老後の学習

く、それ以降は減る傾向がある。同様に、年代が上がるとともに減る傾向のあるものは、年金・生活設計、職業に役立つ知識・技能。こうした経済的関心は若い方が高いという結果は経済不安の結果と一致する。逆に年代が上がると増える傾向のあるのは、老年期の生き方、心の問題、死について、宗教について。こうしたものに対する関心が増すというのは、年をとるとともに内面生活の充実を求めるようになることを反映しているように思わ

れる。30代が落ち込むが概ね年代が上がると増える傾向のあるものは、若い世代の理解、社会や経済の動き。40代にピークがくるものは、社会に参加する方法、ボランティア活動。こうした社会参加の動機が子育てを終え、なおかつ余力のある40代にピークになる点が注目される。60代にピークがくるものは、望ましい食生活、成人病の予防。これは健康不安の結果と一致している。

(10) 自分の将来のおばあちゃん像

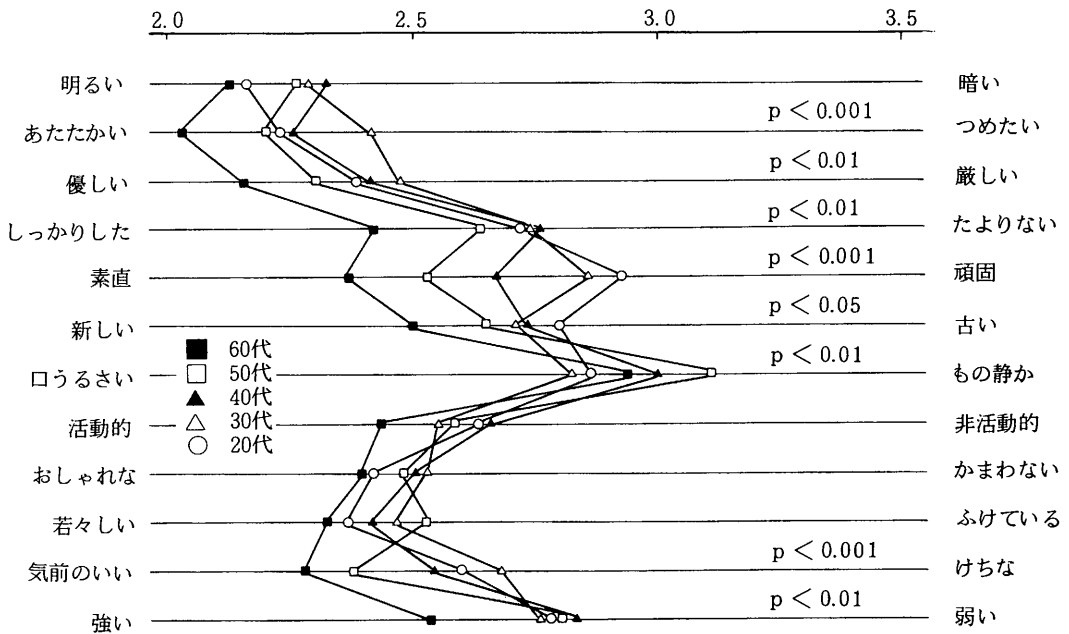


図 11. 自分の将来のおばあちゃん像

図11は、SD法（5段階の評定尺度）による自分の将来のおばあちゃん像の年代別平均のプロフィールを比較したものである。どの年代も概ね似たようなプロフィールを描き、同じようなおばあちゃん像を好んでいることが分かる。その特徴を上げると、明るい、暖かい、優しいという面が好まれ、次いで若々しい、おしゃれといった面が好まれ、口うるさいという面が嫌われている。この質問は、自分の将来のおばあちゃん像を聞いているわけであるが、この結果は、ある意味で、自分の理想の女性

像を描いているのかもしれないという印象がある。年代的にはそれほど大きな差はないが、概して、60代や50代の方が20代や30代に比べ、むしろ積極的な傾向がある。60代や50代の方が若い年代よりもかえって新しいおばあちゃんを好んだり、口うるさいおばあちゃんを嫌ったりする傾向の強い点が興味深い。ある意味で、おばあちゃんに近い年代の方が理想のおばあちゃんへの願望が強いことを反映しているのかもしれない。

要 約

来るべき高齢社会への対応を考える上では、女性が老後をどのように考えているのか明らかにすることがきわめて重要である。そのためには、中高年女性だけでなく、若い女性も含めて年代的な比較検討も必要である。このような観点から、本研究では、家政系女子大の卒業生を調査対象として、彼らの老後意識とその年代的傾向を明らかにすることを目的としている。同窓会名簿に基づいて、調査対象者を20代から60代にわたって各年代から無作為に2,406人抽出し、郵送で調査を実施した。1,282名の有効回答を得た(回収率、約53%)。主な結果は次のようなものである。

① 年代が上がるにつれて、老後開始年齢を遅く知覚する傾向がある。

② どの年代も年齢を意識せず振舞うのが良いとする考え方の人がもっとも多い。

③ どの年代でも大多数が夫も家事の手伝い程度はすべきであると考えている。夫も家事を分担すべきであるという考えは、40代以上よりも30代以下に多い。

④ 60代になると多少減るものの、50代までは、約8割が子供の家族との別居を志向している。

⑤ 夫の親であれ自分の親であれ、どの年代でも大多数が親の介護を引き受けるという考えを示している。こうした積極的態度は20代でもっとも多く、30代以降やや減る傾向がある。

⑥ 20代や30代の比較的若い女性においては、自分の介護を頼む相手として娘や夫を選ぶ割合が多いのに対して、年代が上がるにつれて、病院・施設が増える傾向がある。また、割合としては少ないが、息子か嫁、あるいはヘルパーも、年代が上がるるとともに増える傾向がある。

⑦ 経済状態や住居、仕事、親の介護などに対する不安は、年代が上がるるとともに減る傾向がある。一方、健康状態や自分自身の介護に対する不安は、対照的に年代が高くなるにつれて高くなる。

⑧ 老後の頼りは、どの年代も健康が一番、次が家族、そしてお金、友達の順。また、健康を一番に上げる人は、年代とともに増加し、60代では86%にも達する。一方、家族やお金を上げる人は、年代が上がるるとともに減少している。

⑨ 生涯学習に関する希望は、どの年代も趣味の充実に関する要求が1位である。また、20代や30代では年金・生活設計が2位であるが、40代以後は老年期の生き方が2位を占めている。そして、20代から40代まで3位は適度の運動が占めているが、50代や60代は3位が心の問題である。

⑩ 自分の将来のおばあちゃん像は、どの年代も同じようなおばあちゃん像を愛好している。概して、明るい、暖かい、優しい性格で、若々しい、おしゃれな振舞い方のおばあちゃんが好かれ、口うるさいおばあちゃんが嫌われている傾向がある。

謝 辞

本研究は、東京家政大学特定研究費によって行われた「東京家政大学卒業生の老後意識に関する調査」の一部を分析したものである。本研究の実施に際して、快くご協力頂いた東京家政大学緑窓会の会員の皆様へ心より感謝申し上げます。

文 献

- 青井 和夫 編著 1985 「高学歴女性のライフコース—津田塾大学出身者の世代間比較」
- 富士谷あつ子・上杉 考実 1982 「大卒女性 100万人の時代」 勁草書房
- 上智大学内共同研究 1985 「上智大学女子卒業生の生活と意識 報告書」
- 雇用職業総合研究所 1989 「内面生活からみた高齢者のライフスタイルに関する研究」
- 雇用職業総合研究所 1987 「都市高齢者の生活意識」
- 老川 寛 1985 「日本の家族関係—国際比較にみるその特徴」 高齢化社会年鑑 '85 新時代社
- 清水 浩昭 1985 「年代・世代別にみた家族観の動向」 高齢化社会年鑑 '85 新時代社
- 職業研究所 1976 「大学卒女子の職業と生活に関する調査」
- 湯沢 擁彦 編著 1975 「お茶の水出の50年—高学歴女性の生活史と老後生活」 地域社会研究所 「高齢年齢を生きる」 NO. 7

付 属 資 料

東京家政大学卒業生の

老後への意識に関するアンケート調査表

(老後意識のパートのみ)

Q10. 自分の老後の始まる年齢は、何歳くらいからだと思いますか。次にあげる中から自分の感じに最も近いもの一つを選び、番号に○印をつけて下さい。

- 1 60歳から 2 65歳から 3 70歳から 4 75歳から ①⑩

Q11. 老後の年齢と振舞い方との関係について、どのように思っていますか。次にあげる中から自分の感じに最も近いもの一つを選び、番号に○印をつけて下さい。

- 1 できるだけ若々しく振舞うのが良い
- 2 年齢相応に振舞うのが良い
- 3 年齢を意識せず、振舞うのが良い ①⑪

Q12. 老後、自分の夫が家事を分担することについて、どのように思いますか。次にあげる中から自分の感じに最も近いもの一つを選び、番号に○印をつけて下さい。

- 1 夫は家事などいっさいする必要はない 2 夫も家事の手伝い程度はすべきである
- 3 夫も家事を分担すべきである 4 夫が家事を全部すべきである ①⑫

Q13. 老後、自分の子どもの家族との同居についてどのようにお考えですか。次にあげる中から自分の感じに最も近いもの一つを選び、番号に○印をつけて下さい。

- 1 子供の家族と同居の方が、お互いに幸せ
- 2 子供の家族と別居の方が、お互いに幸せ ①⑬

付問 → どのくらいの時間で行ける距離が望ましいですか

約 時間 分以内 ①⑭ ~ ①⑮

Q14. 次にあげるもののうち、ご自分の将来について不安に感じているものがあれば、その番号に○印をつけて下さい。(いくつでもよい)

- 1 健康状態 2 経済状態(生活費)
- 3 住居・住宅 4 家族・家庭
- 5 仕事 6 親の介護
- 7 自分の介護 ①⑯

Q15. もし親の介護をしなければならなくなったとき、あなたは どうしますか

- <夫の親の場合>
- 1 介護を引き受ける
 - 2 他人に介護を依頼する → 付問1
- 1 自分の親と同居だから
 - 2 住居の広さの関係
 - 3 気を使うから
 - 4 その他 ()

①⑰ ~ ①⑱

<自分の親の場合> 1 介護を引き受ける
2 他人に介護を依頼する

付問2

- | |
|-------------|
| 1 夫の親と同居だから |
| 2 住居の広さの関係 |
| 3 夫に気がねだから |
| 4 その他 () |

(128) ~ (129)

Q16. もし、自分が介護してもらったことになったら、誰に介護してもらいたいですか。

- | | | |
|---------|------------|------------|
| 1 自分の夫 | 2 自分の息子 | 3 自分の息子の嫁 |
| 4 自分の娘 | 5 自分の兄弟、姉妹 | 6 家政婦・ヘルパー |
| 7 病院、施設 | 8 その他 () | |

(129)

Q17. 老後の生活の中で一番頼りになるものは、なんだと思いますか。次にあげるの中から自分の感じに最も近いものを一つ選び、番号に○印をつけて下さい。

- | | |
|---------|---------|
| 1 健康が一番 | 2 家族が一番 |
| 3 お金が一番 | 4 友達が一番 |

(129)

Q18. 次にあげるもののうち、老後に向けて学習してみたいと考えているものがあれば、その番号に○印をつけて下さい。(いくつでもよい)

- | | |
|---------------------|----------------|
| 1 老年期の生き方について | 2 成人病の予防について |
| 3 望ましい食生活について | 4 適度な運動について |
| 5 心の問題について | 6 社会や経済の動きについて |
| 7 趣味の充実 | 8 宗教について |
| 9 社会に参加する方法について | 10 若い世代の理解について |
| 11 ボランティア活動について | 12 死について |
| 13 家族関係全般について | 14 年金・生活設計について |
| 15 職業(再就職)に役立つ知識・技能 | |
| 16 その他(具体的に | |

) (129) ~ (133)

Q19. あなたは、将来、どんな「おばあちゃん」になっていると思いますか。次にあげる5段階の評定尺度を使って、あなたがなっていると思われる「おばあちゃん」のイメージを評定してみてください。各々の評定尺度において、自分の感じに最も近い位置の番号に○印をつけてください。

- | | | | | | | |
|-----------|---|---|---|---|---|------------------|
| <記入例> | 1 | 2 | 3 | ④ | 5 | |
| 1. 明るい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 暗い |
| 2. あたたかい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | つめたい |
| 3. 優しい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 厳しい |
| 4. しっかりした | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | たよりない |
| 5. 素直 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 頑固 |
| 6. 新しい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 古い |
| 7. 口うるさい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | もの静か |
| 8. 活動的 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 非活動的 |
| 9. おしゃれな | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | かまわない |
| 10. 若々しい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | ふけている |
| 11. 気前のいい | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | けちな |
| 12. 強い | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 弱い (133) ~ (134) |

Summary

Thoughts held by women in how they think of spending time when they become much older is of great importance when thoughts are made of how to deal with the aged society in the future. It is necessary to conduct a comparative examination for this purpose, taking into consideration not only women in their middle or higher-age range but also of women in the younger age-range. The goal in this study has been set from this perspective. Women graduating from homeeconomics divisions of women's college have been made the subjects in this investigation. The objective has been to clarify the kind of consciousness held by them regarding life after becoming older and tendencies held among them. An alumni association list was used as a foundation base. Subjects were selected at random from the those in their 20s up to those in their 60s. The total number was of 2,406. The investigation was conducted through general postal service. The number of positive responses was of 1,282 (Response rate approx. 53%). Tendencies were as follow.

(a) The time that old-age is recognized is delayed the older the perceiver is.

(b) For all ages, general consciousness supported the attitude that one should act without self-consciousness of one's own age.

(c) For all ages, the majority supported the attitude that husbands should also help in house-keeping to a certain extent. Those who supported the concept that housework should be shared with husbands were greater among those in their 30's or younger rather those who were in their 40's or older.

(d) Despite the fact that there was slight decrease in those in their 60's, up to the 50's approximately 80% supported different living homes from their own children.

(e) The majority supported the concept that a husband's parents were like one's own. In addition, all age ranges expressed the acceptance of taking care of them in their old-age. This kind of supportive attitude was strongest among those in their 20's. The tendency was slightly weaker among those in their 30's and onward.

(f) The preference held among women in their 20's and 30's was to have their own daughter or husband to take care of them if necessary. In comparison, there was a stronger tendency to prefer hospitals and similar facilities among those in their 40's or older. In addition, there was a slight increase in the request made towards son or his wife among those in their 50's and 60's. If not there was also a rise in the response of assistance from a helper.

(g) Worries in connection to economic situations, dwellings, work, and taking care-of parents decreased as ages rose. On the other hand, anxiety in connection to one's own health condition and being looked-after rose as age advanced.

(h) All ages supported the concept that good health was the firmest thing to rely on even after aging. Other parties one could rely on were in the following order: family, money, and then friends. In addition, those who listed one's own health to be of most importance rose as the age-range reached higher. Among those in their 60's the ratio was at a high 86%. In contrast, those who listed family and money to depend on decreased as the age-range reached higher.

(i) Among interests, that held towards lifetime learning, a good way to feel satisfaction in the hobby remained number one for all age-ranges. Although the number two rank was held in old-age pension & life-style design among those in their 20's and 30's, those in their 40's listed an interest in how to live when they reach their so called "old-age". In addition, the number three rank held among those from the 20's to those in their 40's was in moderate exercise. Number three rank among those in their 50's and 60's was in heart problems.

(j) For one's future image as an old woman, every generation has similar image of old woman. Generally, an old woman having a cheerful, warm-hearted, and tender character and a young and fashionable behavior tends to be popular, and a nagging old woman tends to be unpopular.